様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2018
課題番号：２６３７０８４７

研究課題名（和文）２０世紀ニューヨークにおける黒人コミュニティの質的及び空間的変動に関する歴史研究

研究課題名（英文）A Historical study on qualitative and spatial changes of black communities in twentieth-century New York

研究代表者
村田　勝幸（Murata, Katsuyuki）

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号：７０３２２７７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、ニューヨークのなかでも代表的な「黒人コミュニティ」である中央ブルックリンと北部マンハッタン（ハーレムとワシントンハイツ）に注目し、質的変化と空間的変化というふたつの側面に関して歴史学的な分析を行った。前者は主に「誰が中心的な住民であるか」に関わり、後者はコミュニティの空間的境界の移動に関わる。1960年代後半以降、西インド諸島からの黒人移民の増加を受けて多様性が急速に増した中央ブルックリンが前者を、1960年代以降、コロンビア大学によるハーレムへのキャンパス拡大をめぐって黒人学生や住民が展開したコミュニティの境界線をめぐる攻防が後者をそれぞれ集中的に顕在化した歴史事例である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　多文化共生が今日さまざまな場で叫ばれるなか、多人種多エスニックな社会として知られるアメリカ都市の歴史的経験は非常に示唆的である。従来、ともすれば一枚岩な存在と捉えられてきたアメリカの黒人住民は、とりわけニューヨークにおいては多様性に富んだコミュニティを形成してきた。そうした黒人コミュニティの質的・空間的変動に注目した本研究は、多様性や変化をポジティブなものとして捉えることを可能にするとともに、社会的な紐帯や連帯を考えるにあたって有意義な視座となるだろう。

研究成果の概要（英文）：This research examines both qualitative and spatial changes of black communities by paying close attention to historical conditions of Central Brooklyn and Harlem, two principal black communities in New York City. The former stands for the issue of who represents dominant black residents there and the latter the shift of spatial boundaries of black communities in the city. Central Brooklyn, where local black population has rapidly exhanced its diversity due to a large-scale influx of black immigrants from the West Indies, and Harlem, where local black residents and college students solidified themselves by standing against Columbia University's plan of campus expansion into the western edge of the black community, are among several historical cases. They symbolize the interdependent relations between expanding black diversity and structural changes of New York City.

研究分野：アメリカ史、アメリカ研究

キーワード：黒人史　都市史　人種　アメリカ史　ニューヨーク　コミュニティ

１．研究開始当初の背景

申請者は 2012 年に『アフリカン・ディアスポラのニューヨーク――多様性が生み出す人種連帯のかたち』という研究書を出版し、ニューヨークの黒人住民の内的多様性と人種連帯が相補的な関係にあると論じた。本研究の背景には、同書において不充分にしか扱えなかった「（黒人）コミュニティ」という観点から「アフリカン・ディアスポラ」というテーマに関する分析を深めるという狙いがある。

２．研究の目的

内的多様性と人種連帯が相補的な関係にあるニューヨークの黒人住民を「アフリカン・ディアスポラ」と位置づける過程で、かれらが集中的に居住する「コミュニティ」の歴史的な変化に重要な検討課題として浮上した。具体的には、隣接する別のコミュニティとの境界線の移動に関わる「空間的変化」と、それぞれの黒人コミュニティ内部の構成に関わる「質的変化」の両方を実証的に分析するという課題である。

３．研究の方法

ニューヨーク公共図書館やブルックリン歴史協会などに所蔵されている一次史料を基に、中部ブルックリンと北部マンハッタンの黒人コミュニティに関する実証分析を行った。

４．研究成果

アメリカ史研究において黒人という人種集団は一枚岩的な存在としてともすればイメージされてきた。白人やその他の人種エスニック集団の内的多様性が自明視される一方で、黒人は強制的にアフリカ大陸から連行された奴隷およびその子孫、つまり非移民としてしばしば想起されてきた。こうした白人と黒人に対する非対称な認識はアメリカの人種主義的な認識枠組みを側面から支えてきた。だが重要なこととして、20 世紀後半以降、アメリカの黒人の実態と上記の一枚岩的な黒人イメージの間の乖離は急速に拡大している。ニューヨークの黒人コミュニティに注目する本研究の基底にはなによりこうした状況認識がある。特に 20 世紀後半以降、ニューヨークの黒人コミュニティは急速に多様性を増し、構成要素の質的変化や空間的な境界をめぐる攻防を通じて「アフリカン・ディアスポラ」としてのダイナミズムを涵養してきた。

本研究では以下の地域を対象にした事例研究である。

(1)中央ブルックリン（Central Brooklyn）

ニューヨークの黒人人口にみられる多様性の増進は、なにより西インド諸島からの黒人移民の急増に負うところが大きい。法制度的にみると、1960 年代後半以降の西インド諸島からアメリカへの移民の急増は複合的な要因の産物であった。ジャマイカやトリニダード=トバゴなどのイギリスからの独立と制限主義的な 1962 年英国移民法による旧英領植民地からの移民志願者の締め出し、それに加えて開放的でリベラルな 1965 年移民法（Hart-Celler Immigration Act of 1965）のアメリカでの制定が、ニューヨークを中心としたアメリカ東海岸都市への西インド諸島系移民の大量流入を惹起した。ニューヨーク市の全外国生まれ人口に占める西インド諸島出自者の割合に関してみれば、1970 年の 14 パーセントから 80 年には 25 パーセントに上昇した。1965 年から 80 年までの動きに限定してみると、同時期に渡米してきたニューヨークの外国生まれ人口のうち約 3 分の 1 がカリブ海地域出身である。

1960 年代以降のニューヨークへの移民（言い換えれば外国生まれ人口）に関しては、居住地の分布に重要な特徴がみられる。1970 年時点でニューヨーク市の外国生まれ人口（総数 143 万 7053 人）のうち 31.8 パーセント（45 万 6636 人）がブルックリン、29 パーセント（41 万 6887 人）がクイーンズに居住していたが、1980 年には同総人人口（167 万 199 人）のうちブルックリンが 31.8 パーセント（53 万 973 人）、クイーンズが 32.3 パーセント（54 万 818 人）と両地区とも外国生まれ人口の中心地であることがわかる。西インド諸島系移民が多く移住したブルックリンに絞ってみてみると、1980 年時点で約 4 分の 1 が外国生まれであり、1970 年代を通じて同地の外国生まれ人口は 17 パーセント増加している。この増加傾向は衰えず、1990 年時点での同地の外国生まれの比率は 29 パーセントであった。このブルックリンの外国生まれ人口のなかでも特に突出しているのがジャマイカやハイチなどからの移民であった。ニューヨーク市都市計画局のある報告書によれば、1983 年から 89 年にブルックリンにやって来た移民のうち 39 パーセントが「非ヒスパニック・カリビアン」であった。また西インド諸島系の各移民集団にみられるブルックリンへの集中については、グレナダ系の 86 パーセント以上、バルバドス系の 76 パーセント、ハイチ系の 74 パーセント、トリニダード=トバゴ系の 65 パーセント、そして 50 パーセントを少し下回る程度のジャマイカ系が同地区に定住しており、同地区への集住傾向を示している。

黒人であり移民（外国生まれ）でもある西インド諸島系が特に多く居を構えてきたのが、中央ブルックリン（Central Brooklyn）である。「ニューヨーク市におけるカリビアンのメッカ」ともいわれる同地域には、クラウン・ハイツ（Crown Heights）やベッドフォード=スタイヴェサント（Bedford-Stuyvesant）、フラットブッシュ（Flatbush）、イースト・フラットブッシュ

（East Flatbush）などのコミュニティ地区が含まれている。ニューヨーク市都市計画局の報告書も、1983 年から 89 年までの移民の多くが中央ブルックリンを居住地として選び、そのうち約 70 パーセントが非ヒスパニック・カリビアンであったと記している。

西インド諸島系がハーレムなどの伝統的な黒人コミュニティを避けた中心的な理由のひとつとして建築様式という側面がある。中央ブルックリンは比較的安価な家族用の住宅を多く供給していたが、1960 年代・70 年代に中央ブルックリンから大規模な「白人の逃避（white flight）」が起こると、西インド諸島系が中心となってその空白を埋めていった。小規模な住宅を購入するという西インド諸島系の行為は、自分自身と子供たちのための資本蓄積の一方法であり、エスニックな文化的伝統や家族の絆という裏付けがあった。これらを歴史的・文化的な背景としながら、中央ブルックリンは「中核的なカリビアン地区」としての位置づけを確かなものにしていった。

そうした「中核的なカリビアン地区」のひとつであるクラウン・ハイツは、西インド諸島系を重要な構成要素とした「アフリカン・ディアスポラ」が体現する内的多様性と人種連帯の連動を象徴的なかたちで映し出している。西インド諸島系中心の黒人住民は、1970 年代頃から大規模に移住してきたルバヴィッチ派――ハシド派のひとつ―のユダヤ系住民との間に緊張を抱えていた。同地の不動産をユダヤ系住民が熱心に買い求めるという、黒人住民からみての「住宅問題」を伏線のひとつとして、黒人住民とユダヤ系住民の間には長らく人種間対立が存在し、そうした不和を表面化したのが 1991 年 8 月に起こったクラウン・ハイツ暴動である。ユダヤ系運転手による西インド諸島系移民少年の「轢殺」とそれへの黒人住民の抗議に端を発したクラウン・ハイツ暴動は、黒人住民対ユダヤ系住民という人種間対立図式でこれまで理解されてきた。

だが黒人住民は決して一枚岩な存在ではなく、実のところそこには「人種内対立」も存在した。西インド諸島系の指導者のなかにはユダヤ系住民に対してだけでなくアフリカ系アメリカ人の指導者にも批判の矛先を向けるものが多くいたのである。たとえば、クラウン・ハイツの聖マーク教会のヘロン・サム神父はルバヴィッチ派への批判者という姿勢を貫く一方で、西インド諸島系住民が支援したにもかかわらずアフリカ系アメリカ人の政治家はなんの見返りも与えなかったとも指摘している。だが皮肉なことに、サム神父はハーバート・ドートリーなどのアフリカ系アメリカ人指導者からはルバヴィッチ派に魂を売った裏切り者と断罪されていた。クラウン・ハイツ暴動をきっかけに西インド諸島系指導者とアフリカ系アメリカ人指導者の間で激しい批判の応酬もみられたが、そうした展開が西インド諸島系指導者に自らの政治的姿勢を自己批判する機会を与えたことは重要である。かれらは、西インド諸島系住民がコミュニティ内の人口数に見合った集団としての政治を充分に行使していないことや、一時滞在者メンタリティを保持し続けていることを批判的に捉えていった。また、西インド諸島系は政治的に弱体な、「不可視性」を体現した存在であり、そこから脱するためには数的プレゼンスを活かし自らを政治的に「可視化」する必要があることを痛感したのである。中央ブルックリンにおいて、人種間関係のみならず人種内関係が、多様性を内包した「アフリカン・ディアスポラ」として黒人人口の有り様をいっそう強く規定していった。

(2)北部マンハッタン――ハーレムおよびワシントンハイツ

20 世紀末以降、セントラルパークの北に広がるハーレムは再開発の対象地区になり、空間的な流動性が増大した。そのなかでたとえば同地区の西部に位置するコロンビア大学は、ニューヨーク市と連携しながら土地や不動産の取得、校舎の建設というかたちでハーレムの西端マンハッタンヴィルともいう――への進出を行った。コロンビア大学の（公称）「モーニングサイド・キャンパス」のハーレムへの拡張は当然ながら黒人中心のハーレム住人による激しい批判を惹起したが、そうした攻防は同時にハーレムの内と外を隔てる境界線の流動性と状況依存性を現前化した。また、大学の拡張プランの公表と「ハーレム進出」に対する地元住民の抗議行動を通じて、「ハーレムの住民であるわれわれ」としての意識が黒人たちの間で一定程度確認強化されたことは間違いない。

黒人住民の集合的記憶という観点からすれば、21 世紀になってのこの比較的新しい動きは、かれらに歴史的教訓を思い起こさせるものでもあった。全米各地、とりわけ都市部の大学でニューレフトや「ブラック・パワー」の運動が燃え上がっていた 1960 年年代末、コロンビア大学においてはハーレムへの「進出」が火種となっていた。当初はハーレム住民からも肯定的な反応さえあった、ハーレム西端のモーニングサイド公園での大学のレクリエーション施設（ジムナジウム）建設計画は、表向きの説明とは異なりハーレム住民による利用が差別的なまでに制限されることがわかると学生と住民双方から攻撃にさらされるようになった。その人種主義的性格をもじって「ジムクロウ（gym-crow）」とも証されたコロンビア大学の施設建設計画への抗議行動は、とりわけコロンビア大学の黒人学生組織（SAS: Students’ Afro-American Society）をエンパワーするとともに、キャンパスでの学生運動とハーレム住民を架橋する結果となった。最終的には大学によるジム施設建設計画撤回へと帰結した学生とハーレム住民の共闘は、ハーレムの空間的な境界線をめぐる攻防の歴史事例であり、共闘を梃子とした人種連帯的な「われわれ」意識を構築強化する重要な契機となった。

それゆえに、30 年ほどして再び表面化したコロンビア大学によるハーレム進出は、決して 21 世紀転換期に突如浮上した開発プランではなく、開発者の側にとってもコミュニティ住民にと

っても、これまでの歴史の再演という側面を持っている。ただ見過ごしてはいけないのは、ハーレムの黒人住民が同地区の「再開発」に対してつねに受動的な立場にあったわけではないことである。実のところ、1960 年代末以降かれらはさまざまな組織や委員会（ARCH: Architects' Renewal Committee in Harlem; WHCO: West Harlem Community Organization など）を通して、主体的に自身のコミュニティの現在と将来に関わることでハーレムの空間的な境界線引きに影響を及ぼし続けてきたのである。

空間的変化と質的変化の両方を考えるうえで興味深いのが、ワシントンハイツという事例である。ハーレムの北西に位置し、現在ではドミニカ系住民中心のコミュニティであるワシントンハイツについては、広義のハーレムの一部と捉える見方もあった。だが、現在はハーレムと境界を接する別個のコミュニティであると一般的には了解されている。もともとはイタリア系などの「白人」住民が多く住む地区であったが、プエルトリカンの移住者が増え、1950 年代以降にはドミニカ系住民中心に人口構成が移行するというエスニック・ターンオーバーが大規模に展開した。ドミニカ系住民の居住地が南に拡大するに伴い、ワシントンハイツとハーレムを画する境界は南東に向かって引き直されていった。「ワシントンハイツの空間的拡大」、あるいは「ハーレム西部におけるスペイン語系住民の急増」として近くされるこの動きは、空間的な移動をどう捉えるかをめぐる立場の違いを反映している。

ただし、ワシントンハイツを「黒人コミュニティ」と固定的に理解することが適切かどうかについては、ドミニカ系住民自身の人種意識と関わってデリケートな問題をはらんでいる。多くの研究者が指摘するように、大多数のドミニカ系にとって「黒さ」はハイチ系と自らの同一視を許す「スティグマ」であり、それゆえに多くのドミニカ系はスペイン語話者という立場とエスニックな独自性を前面に出して「黒人」としてのカテゴライゼーションにしばしば抵抗してきた。それでも、そうした他者化戦略を挫くように外部社会がしばしばかれらのエスニックな差異を周縁化し、黒人集団として一括りに捉えがちであったことも事実である。そうしたなか、アメリカ社会はびこる人種主義に抵抗するべく自ら主体的に「アフリカン・ディアスポラ」として自己同定するワシントンハイツのドミニカ系住民が多くいたことは重要であろう。従来とは異なる黒人コミュニティの質的変化を考えるうえで、ワシントンハイツのドミニカ系コミュニティは示唆的な事例である。

本研究プロジェクトを通じて、ニューヨークの黒人コミュニティの空間的変化と質的変化が黒人移民をめぐる人口動態変化やニューヨークの都市構造変化などに媒介されて緊密に結びついていることが明らかとなった。また、「黒人コミュニティ」という呼称や枠組みが認識そのものを固定的・通俗的な方向へと誘導しかねないという危うさも遡及的に理解することができた。「アフリカン・ディアスポラ」という語は内的多様性を軸とした人種連帯をすくい取る新しい呼称／枠組みであるが、たとえば日常的には別個の住民集団としての自己認識を有するドミニカ系やハイチ系、アフリカ系アメリカ人が警察の残虐行為（police brutality）などの人種主義的に直面して連帯するという現象を理解するのに有用であるといえるだろう。またそうした人種連帯は、こんにち国境を越えグローバルな規模で展開している点も重要である。

以上のような成果を踏まえつつも、本研究にはいくつかの限界があったことも事実である。まず想定外だったのは、ワシントンハイツに関して一次資料の収集に難航したことである。同地のコミュニティの歴史実態を網羅的に知るための史資料へのアクセスが限られたため、社会史的な分析を充分に行うことができなかった。だが結果的には、「アフリカン・ディアスポラ」という枠組みでテーマを捉え直すという方向に切り替えることで全体を俯瞰する視角を得たという意味で怪我の功名という側面があったことも事実である。こうした「限界」を今後の課題とすることで、「黒人コミュニティの質的・空間的変化」というテーマに関しては引き続き分析を深めていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　２件）

① 村田勝幸、“Solidarity Based Not on Sameness: Aspects of the Black-Palestinian Connection,” *Japanese Journal of American Studies*、 査読有り、28、2017、pp.25-46.

② 村田勝幸、「せめぎ合いの場としての『不可視性』――1960 年代後半以降のブルックリン（ニューヨーク）における西インド諸島系の位置」、『歴史学研究』、査読有り、第 946 号、2016、pp.66-76

〔学会発表〕（計　２件）

① 村田勝幸「『ヘイトの時代』の移民・難民保護にみるアメリカ史の『特殊性』と『普遍性』」、日本アメリカ史学会第 15 回年次大会、2018 年 9 月 23 日、日本女子大学

② 村田勝幸「アメリカ黒人とパレスティニアンの連帯に関する一考察――エリック・ガーナ

ー事件（2014 年 7 月）とマイケル・ブラウン事件（2014 年 8 月）をめぐって」、日本アメリカ学会第 13 回年次大会、2016 年 9 月 18 日、明治大学

〔図書〕（計　0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。